

内視鏡的膵・胆管造影法の実際

東京女子医科大学消化器内科 大井 至 著

東京医科大学内科教授

芦 沢 真 六

1966年(昭和41年)春、D. A. A. D. の招聘によりドイツの Nürnberg-Erlangen 大学に滞在していた私は、当時 Demling 教授のもとで内視鏡室のチーフをしていた Oberarzt の Dr. Ottenjahn とある日次のような会話をした。

「世界中でどの国が一番早く生きた十二指腸乳頭をルーチンに見ることができるだろうか？」

「お互いにその目的に向かっても大いに努力し、競争しましょう」

——それからわずか4年後——

1970年(昭和45年)春、第12回日本内視鏡学会総会(大阪)で、会長湯川永洋博士はシンポジウムの1つとして「十二指腸の内視鏡検査」を取り上げられた。

当時わが国ではファイバースコープの飛躍的な進歩があったとはいえこのテーマを決められたことは会長の深い洞察による大英断といってよく、それにこたえて選ばれた若いシンポジストらは本当によくやって、これを契機として十二指腸内視鏡検

査法はルーチンのものとなったといっても過言ではない。著者大井博士はこの時の演者の1人であり、その時すでに主として「内視鏡的膵胆管造影法」のパートを担当発表された。

生きた十二指腸乳頭をルーチンに見るだけではなく、さらにカテーテルを乳頭口より挿入し、造影剤を注入することにより、生体の膵管や胆管を造影することができるようになったその時からの研究の成果がまとめられたのがこの著書である。

なるほど新しい研究を誰よりも早く発表することは必要であろう。しかしそれを意義あるものと考えたならば皆のものとする努力もまた大切であり、それでこそその研究はさらに進歩してゆくこととなろう。従来の確な診断法にかける特に膵において膵管が見られるようになったことは確かに新しいことであり、これを皆のものとする必要がある。その意味からだけでもこの著書には、自分で苦勞し自らのからだで会得されたことがそのまま書かれており、この

本を通読してくれさえすれば明日からでも膵胆管の造影のみならず、その読影も可能となるのだとの自信が行間にうかがわれる。そして当然のことではあるが、すべての内視鏡を行なう人にも強く要求される解剖学的なことをも詳細に解説されたことは著者の研究がほんのものであったことのひとつの証拠ともいえる。

しかしこの著書とて、これで完成されたものでないことは著者自らがよくご存じであろう。一応膵胆管が造影できるようにはなったが、これが検査体系のなかにどのように組み合わせられ、かつ肝、特に膵の病態とどのような結びつきがあるのかなど今後に残された問題は多い。その長く続くであろう道程の mile stone としてこの著書を受け取り、今後も著者のこれまでに変らぬひらめきとたゆまざる努力に期待したい。

(医学書院刊・B5・頁230・図40・写真228・¥7,000・〒200)